

211 温泉：日本とフランス（2023 年 11 月 14 日）

2021 年、フランス中央部にあるヴィシーが、「ヨーロッパの大温泉保養都市群」として世界遺産に登録されました。この世界遺産は、18 世紀初頭から 1930 年代まで、天然鉱泉を活用して栄えたヨーロッパの 7 か国 11 都市から構成されています。ヴィシーは、フランスで登録された唯一の都市です。



ヴィシーには、源泉（写真右上は飲用可能なセレストン源泉、写真右中は複数の源泉を引いたオール・デ・スルス（直訳すると「源泉ホール」）、治療や療養を目的とした施設のほか、富裕層が滞在するためのホテルや別荘、またカジノ、オペラ座（写真右下）や競馬場といった娯楽施設も作られ、一大保養地として発展しました。ヴィシーは、1860 年代からナポレオン三世によって、開発が大きく進みました。1870 年代から第一次世界大戦直前の 1914 年までの最盛期には、年間約 15 万人が訪れ、ヴィシーは「温泉保養都市の女王」と呼ばれました。市内の中心部には、アール・ヌーボー様式やアール・デコ様式の美しい建物に残り、当時の繁栄ぶりがうかがえます。



日本にも、治療や療養のために温泉を活用してきた歴史があります。日本列島は火山地帯にあり、日本全国で温泉が湧きます。日本には 3000 以上の温泉地があり、27,000 以上の源泉があるとされています。実は、大都会の東京にも温泉があるのです！掘削技術が発展した現代では、1000 メートル以上の深さまで土を掘ることが可能となり、都会の温泉施設で手軽に温泉を楽しむことができます。

日本とヨーロッパの温泉の大きな違いは、ヨーロッパの場合は飲泉が中心である一方で、日本の場合は温泉に入浴するのが一般的なことです。湯治は、温泉地に長期滞在し、一日に何度か入浴をしながら病気の治療や療養を行います。中世の時代は、湯治は特権階級に限られていましたが、17 世紀以降、江戸時代になると街道が整備されて温泉地への移動が可能となり、一般の人も湯治を行うようになりました。日本で湯治場というと、山間の僻地にあり、娯楽もない質素

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

な温泉地というイメージがあります。湯治客は長期滞在をするため、湯治場には自炊できる共同の炊事施設が整備されています。日本の湯治場は、ブルジョワ階級が、華やかな社交を楽しみながら温泉治療をしていたヴィシーとは、全く様子が異なります。現代では、治療目的の湯治場の数は減りましたが、かつての湯治場は、場所によっては携帯電話の電波が入らない山奥にあることもあり、こうした温泉地は秘湯として人気を集めています（写真右は、秋田県の乳頭温泉郷にある鶴の湯温泉。）。



1000メートル以上も地下を掘削できるようになったのは最近のことで、古くから発展してきた温泉地では、地上近くに高温の源泉があります（写真左上は、長野県・渋温泉の噴き出す源泉、写真左下は日本一温度が高い（98℃）兵庫県・湯村温泉の源泉）。温泉地によって温泉に含まれる成分が異なり、温泉の色や匂いも様々です。温泉宿には、家庭のお風呂では味わえない大浴場や露天風呂があるのも魅力です。温泉と一口に言っても、フランスと日本では、その活用方法も温泉地の発展の歴史も全く異なることが興味深いと思います（写真右下は、1910-1930年頃の大正ロマンの雰囲気

が残る山形県・銀山温泉）。

